

解題

ここに掲載するのは、フィリップ・セリエ教授が、1995年9月29日、東京大学大学院人文社会系研究科の多分野交流研究演習「創造の場とテキストの伝承」において行われた特別講義の原稿である。

セリエ教授は、東京大学学術研究奨励資金による招聘研究者として、昨年9月26日から10月22日まで滞日された。その間、本学での3回の特別講義を始めとして、上智大学、日仏会館、パスカル研究会での講演と研究発表、さらに福岡と関西にも足を伸ばして、福岡フランス十七世紀研究会、関西学院大学、京都大学における講演と研究交流など、精力的な活動を通じて、日本でフランス文学研究を志すものを大いに裨益された。

セリエ教授は、ジャン・メナール教授と並んで、今日のフランス17世紀文学研究、とくにパスカル研究の第一人者であり、1988年には、メナール教授の後任として、パリ・ソルボンヌ大学に任命された。主著としては、*Pascal et la liturgie* (P.U.F., 1966)及び*Pascal et saint Augustin* (A. Colin, 1970)があり、とくに後者は名著の誉れ高く、Albin Michel社の「Bibliothèque de l'Evolution de l'Humanité」叢書の一冊として、昨年再刊された。批評校訂の仕事としては、パスカルの『パンセ』が重要である。これは、パスカルの姉ジルベルト・ペリエが作らせたと考えられる自筆草稿の写本（いわゆる「第2写本」）を初めて底本として採用した版であり、まずはMercure de France社から出版された（1976）が、後に新版がBordas社の「Classiques Garnier」叢書に収められ（1991）、委曲を尽くした序文と信頼の置ける注も相俟って、近年多数出版される『パンセ』の版のなかでも、標準版の地位を確立しつつある。また、本テキストとの関連でいえば、ポール・ロワヤルの隠士の一人であったアルノー・ダンディイの手になるフランス語訳のアウグスティヌスの『告

白』の新版刊行 (Gallimard, coll. « Folio », 1993) も特筆に値する。

セリエ教授の来日はこれで2回目。前回は、1988年の東京大学シンポジウム「パスカル、ポール・ロワヤル、東洋、西洋」の開催の折り、メナール教授とともに、フランス側責任者の一人として、司会と発表のほか、シンポジウムの組織・運営に心を砕かれた。それ以来、教授を指導教官と仰ぐ日本人留学生は少なくない。

「17世紀フランス文化における聖アウグスティヌス」という巨大なテーマに鮮やかで胸のすくような見通しを与えるこのテキストの内容に解説は無用であろう。何しろこれは、「パスカルと聖アウグスティヌス」を主題とする博士論文以来、深化発展して止まないセリエ教授の研究のエッセンスなのだから。ただ、これを読むに際して、フランスにおけるフランス文学の教育・研究のあり方の大きな特徴として、古典ギリシア・ラテン文学との関係をきわめて重視することは、周知のことではあろうが、心得ておいた方がいい。フランスの大学には、もちろんフランス文学を専門とする学科はあるが、教員の免状の種類に「フランス文学」はない。フランス文学に関係する免状は、「古典文学」と「近代文学」の2種類である。「近代文学」は、フランス文学の作家・作品研究を中心として、比較文学・文学理論に及ぶが、ラテン語・ラテン文学も必修科目である。いわんや「古典文学」の分野では、ギリシア語・ラテン語とギリシア・ローマの作家・作品研究が、フランス文学に劣らぬ重要性をもつ。一般教育そして教養の観点からすれば、フランス文学と西洋古典は一体なのである。

ただ、伝統的な——といっても、19世紀以降、徐々に形作られてきたものに過ぎないが——フランスの文学教育そして研究は、ある重要な考察の領域を、見落としたとまでいわないにせよ、著しく軽視してきた。それは、古代末期と中世のキリスト教ラテン文学が、フランス文学あるいはより広く俗語文学の成立と発展に果たした役割である。このような事態の根底には、実

は、フランス大革命以降のフランスの教育体制、その指導理念である国家と宗教の分離がある。もちろん政教分離の原則は、民主主義と自由主義への道を歩んだ西欧型の近代国家が勝ち取った大切な価値であるが、逆にそれが、宗教と俗世が相互に浸透していた近代以前の社会と文化の理解を妨げることがないとはいえない。セリエ教授の特別講義は、そのような欠落を補う手がかりとしても貴重で意義深いものである。

なお、このテキストの日本語訳は、関西学院大学の森川甫教授の尽力で、『関西学院大学社会学部紀要』第75号（1997年）に発表される予定である。

最後に私事にわたるが、セリエ教授来日の翌日に急病で入院を余儀なくされた筆者に代わって、教授の東京滞在中、行き届いた配慮を惜しまれなかったフランス文学研究室の同僚諸兄姉と学生諸君のご厚誼には、お礼の言葉もない。今回の招聘計画の協力者であった駒場の支倉崇晴教授にも並々ならぬお世話になった。人の情けのありがたさをかみしめるばかりである。

塩川 徹也